

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：12613

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2022

課題番号：21K20041

研究課題名（和文）19世紀における国学者の歴史意識と遺跡・遺物観

研究課題名（英文）Historical Consciousness and Perceptions of Historic Sites in 19th century  
Kokugaku

研究代表者

古畑 侑亮（FURUHATA, Yusuke）

一橋大学・大学院社会学研究科・研究補助員

研究者番号：10906902

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：根岸武香と井上淑蔭の書簡や著作の比較検討の結果、現代考古学のように遺跡やモノに基づいて考えることは国学者にとって当たり前ではなく、むしろ神典・史書による考証が遺跡・遺物認識を大きく規定していたことが浮き彫りとなった。明治10年代以降、西洋考古学書の受容によって学知が更新されていく中でも文献考証による拘束性は根強く引き継がれていく。その傾向は西洋天文学の受容においても同様であった。なかでも淑蔭は海外にも目を向け、外国の書籍も参考にするべきとの柔軟な態度を示していた。しかし、西欧の学知ももともとは日本で説かれていたものとして解釈され、国学思想に包摂されてしまう宿命にあったことが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、江戸派をはじめとした国学の明治初期における地域的な展開の事例として近代への展望を示す成果となった。また、考古学・天文学を事例に西文学知の受容実態を描き、既存の学問による規定性の強さを明瞭にした。個々に視座を置き、思想的背景を含めて分析していくことで、諸分野の成果を総合化する方法を具体的に提示できたと考える。

さらに、草創期のアカデミズムの周辺で活動していた国学者の視座からアカデミズム史学の歴史叙述に関する諸研究を逆照射する成果でもあり、転換期にある現代の大学と社会との関係を問い直す手がかりとなるはずである。

研究成果の概要（英文）：This research examined and transcribed the letters and writings of Takeka Negishi and Yoshikage Inoue. It revealed that the perceptions of historic sites and objects by Kokugaku scholars was based on their understanding of Shinto texts and historical books, rather than that of material culture as in modern archaeology. Even after the Meiji period, when academic knowledge was updated with the spread of Western archaeology, this text-based understanding remained prevailing. Although Yoshikage was open to Western books and knowledge, they ultimately thought Western expertise could be traced back to ancient Japanese philosophy and thus should be encompassed in Kokugaku.

研究分野：19世紀史学史

キーワード：根岸武香 井上淑蔭 色川三中 考古 好古 神話的世界観 西文学知

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

前近代の人々と遺跡・遺物との関係については、戦前以来、考古学や人類学において前史として取り上げられてきた。近年では、人々が遺跡・遺物をどのように捉えていたかを社会的背景、階層による認識の違いから追究する「遺跡・遺物の社会史」が提起されている。しかし、その方法論においては時代や地域の異なる様々な人物の著作から「考古学」に当てはまるものを恣意的に切り出していることがほとんどである。したがって前近代においては歴史学や考古学といった枠組みは存在せず、草創期のアカデミズムにおいてさえその区分は明確ではなかったことが捨象されてしまっている。また、この方法は時代の大勢をつかむのには適しているが、なぜそのような関心や認識をもつに至ったのか、ひとりひとりの思想的背景が抜け落ちてしまう点にも留意が必要である。一方で思想史研究においては、日本の思想風土がヨーロッパ近代考古学思想をどのように受け入れたかが学派の異なる人物を事例に検証されているが、受容のされ方の共通点が強調され、学問や派閥による認識の違いやその要因は意識されていない。

明治後期以降の考古学の方法論に『古事記』や『日本書紀』など神話の「呪縛」が指摘されていることを併せて考えると、とくに古代の文献に基づいて当時の日本や日本人の姿について思索をめぐらしていた国学者に注目する必要があるだろう。

### 2. 研究の目的

本研究では、個々の国学者に視座を置いて分析を行うことによって、従来各分野における「学史」の観点から切り取られていた国学者の学問や諸活動の相互関係を明らかにし、幕末・明治という時代状況の中でそれらを総体として捉えることを目指す。この方法によって、19世紀における歴史意識と遺跡・遺物認識の特質を明らかにすることが目的である。

### 3. 研究の方法

本研究では、平田派と江戸派というふたつの学派の国学者を取り上げる。主な分析対象は、平田派の根岸武香(1839 - 1902)と江戸派の井上淑蔭(1804 - 1886)である。

(1)【資料の蒐集・翻刻】埼玉県立文書館をはじめとした全国の所蔵機関への調査を行い、武香と淑蔭の著作・書簡をデジタルカメラにて撮影する。アシスタントの協力を得て、翻刻を進める。

(2)【西洋考古学の知識の受容実態の解明】西洋考古学書の知識を受容するにあたって国学思想との間で生じた摩擦や融合、あるいは包摂のあり方を考察する。

(3)【平田派と江戸派との比較】国学と考古学に区分される著作の比較分析によって、西洋考古学の知識の受容とアカデミズムとの関わり方について平田派と江戸派との間でどのような共通点と相違点が見られるか、学派の違いによる規定性を探る。

(4)【歴史意識と遺跡・遺物観との関係解明】著作のうち歴史学と考古学に区分されるものを比較し、歴史意識の遺跡・遺物観への影響、逆に遺跡・遺物から得た知見が歴史叙述に与えた影響に目を凝らす。

(5)【研究成果の発表】研究成果を歴史学・史学史・考古学史・国学史に関わる研究会にてそれぞれ発表し、論文文化を目指す。

### 4. 研究成果

(1) 初年度である2021年度は、根岸武香(1839 - 1902)と井上淑蔭(1804 - 1886)の書簡や著作の調査を行い、幕末・明治初期における国学者の遺跡・遺物観の研究を始動させた。調査にあたっては、所蔵先が分散している淑蔭の著作の蒐集を優先した。

関東圏の所蔵機関への調査を行なった。そして、東京都立中央図書館に所蔵される武香・淑蔭関係書簡のうち未翻刻のもの、および埼玉県立文書館所蔵の『皇産霊能神霊』をはじめとした淑蔭の著作の翻刻作業を進めた。

自治体史や考古学史において「埼玉県初の考古学書」と評価されてきた淑蔭の『石剣考』(1869年序)の典拠を再検討した。その結果、同書には栗原信充『刀剣図考』第2集(1843年刊行)をはじめとした先行研究からの「孫引き」が多く、実物の石剣(石棒)はほとんど参照されていないことが判明した。さらに、陰陽石についての記述に富む『皇産霊能神霊』や『国学徴』など彼が著した国学書との比較を加えることで、西洋考古学書の知識を受容するにあたって国学の知識・思考との間で生じた摩擦や融合、包摂のあり方を明らかにした。

研究成果を第6回日本文化研究所研究会および第10回歴史論研究会関東部会例会にて発表

した。また、刊行準備に携わった國學院大學日本文化研究所編『歴史で読む国学』（ペリカン社、2022年）に複数のコラムを執筆できたのも本研究によるところが大きい。

(2) 最終年度にあたる2022年度は、蒐集資料の翻刻と成果の論文化に力を注いだ。

年度の後半、土浦市立博物館からの依頼をきっかけとして、土浦の「地域派」国学者・色川三中(1801-1855)の著作の調査を開始した。学芸員の方の協力を得て博物館の所蔵資料を探索するうちに、三中の著作が幕末における国学者の遺跡認識を知るうえで恰好の素材であることが判明し、分析対象に加えることになった。

アシスタントを増員し、撮影データの整理と翻刻作業とを加速化させた。その結果、前年度に翻刻した『国学徴』の続篇の他、神道や言語に関わる井上淑蔭の著作を翻刻することができ、淑蔭の国学思想の他、教導職として国民教化に励む神道家としての姿が浮かび上がってきた。

歴史論研究会での報告内容を発展させた論文を『考古学ジャーナル』770号に掲載、今後の研究のプロットとして示した。また、発表の概要についても『史鏡』6号に要旨として掲載した。

三中の「発掘報告書」とも言える『黒坂命墳墓考』（土浦市立博物館所蔵）の翻刻を行った。加えて奈良の天理図書館へ調査に赴き、『黒坂命墳墓考』の複数のバージョンを比較検討した。その成果を翻刻と共に『土浦市立博物館紀要』33号に掲載した。

さらに、西洋考古学の受容と西洋天文学の受容のあり方に共通性が見られることに気づき、淑蔭の宇宙論における国学思想と新しい学知との相克を分析した。関東近世史研究会の3月例会にて報告の機会を得、文人や考証家を研究する幅広い世代の研究者と共に貴重な意見交換をすることができた。今後の研究の指針を得ることができたのも大きな収穫である。

(3) 今後の課題

新型コロナウイルスの感染拡大および職場環境の変化により、関西方面の所蔵機関への調査は十分に行うことができなかった。今後、國學院大學の母体である皇典講究所の創設に携わった井上頼圀(1839-1914)を結節点として、19世紀後半における近代アカデミズムと在野の間に横たわる国学ネットワークを発掘していく予定である。武香と淑蔭は、まさにそのネットワークに連なる国学者として重要であり、本研究を足掛かりとして引き続き資料蒐集と思想の解明に努めていく所存である。また淑蔭は、仏教の須弥山説への批判を行う一方で、その主張には仏教思想との共通点も見られる。近代仏教研究等の進展も踏まえ、同時代の隣接する思想と比較検討していくことも今後の課題となる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 古畑侑亮	4. 巻 33
2. 論文標題 幕末における国学者の文献考証と遺跡認識 色川三中『黒坂命墳墓考』稿本の比較から	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 土浦市立博物館紀要	6. 最初と最後の頁 26-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古畑侑亮	4. 巻 6
2. 論文標題 《報告要旨》明治初期における国学者の文献考証と遺物認識 井上淑蔭の石器研究を中心に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 史鏡	6. 最初と最後の頁 8-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古畑侑亮	4. 巻 770
2. 論文標題 明治初年における国学者の文献考証と遺物認識 井上淑蔭の石剣研究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 考古学ジャーナル	6. 最初と最後の頁 43-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 古畑侑亮
2. 発表標題 明治初期における国学者の文献考証と遺物認識 井上淑蔭の石器研究を中心に
3. 学会等名 第10回歴史論研究会関東部会例会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 古畑侑亮
2. 発表標題 明治初期における考古学的知識の受容と遺跡・遺物観 埼玉県域の国学者を中心に
3. 学会等名 第6回日本文化研究所研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 古畑侑亮
2. 発表標題 幕末・明治初期における西欧学知と国学思想の相克 井上淑蔭の天文学研究をめぐって
3. 学会等名 関東近世史研究会3月例会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 一戸渉・遠藤潤・小田真裕・木村悠之介・齋藤公太・武田幸也・問芝志保・古畑侑亮・松本久史・三ツ松誠	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ペリかん社	5. 総ページ数 304
3. 書名 『歴史で読む国学：コラム「歌文派と古道派」「国学者の蔵書」「モノと国学者」』（古畑侑亮）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関